

音楽大学におけるリトミックの認知度に関する一考察

— 質問紙調査による傾向の分析 —

A study on the understanding of eurhythmics at colleges of music

— Analysis of tendency based on a questionnaire survey —

長 島 礼*

Abstract

Eurhythmics is an educational method that was established by Emile Jaques-Dalcroze (1865–1950) as a form of music education. However, in Japan it is generally recognized as a method of early childhood education, and is not thought to be commonly associated with music education.

A previous actual condition survey on the understanding of eurhythmics conducted by Nagashima on a total of 123 childcare workers showed that all subjects knew of eurhythmics, and that efforts were being made to incorporate eurhythmics into childcare. However, the results also showed a lack of understanding of eurhythmics.

In this study, we focused on eurhythmics as an educational methodology in music, and conducted a questionnaire survey on instructors working at colleges of music in order to elucidate the understanding of eurhythmics as well as the focus on eurhythmics in music education settings in Japan.

キーワード：音楽教育、リトミック、音楽大学におけるリトミックの位置づけ

I. はじめに

エミール・ジャック＝ダルクローズ (Emile Jaques-Dalcroze, 1865–1950、以下ダルクローズと略) によって創案されたリトミックは、本来音楽の1教育方法論として確立されたものであり、音楽への理解を深めることを目的とした音楽の教育方法の1つとして、1900年代初頭にヨーロッパを中心に注目された。わが国では音楽以外の分野で紹介され、その後、音楽教育者の小林宗作 (1893～1963) によって、幼稚園や小学校という教育の場に積極的に取り入れられ実践された。リトミックは今日に至っても、幼児教育の場において、子どものリズム活動の1方法論として関心をもたれている。しかし、保育の場に導入され注目されたという経緯によって、わが国ではリトミックが幼児教育の分野のものだと理解されることが多く、音楽教育としての認識が薄いのではないかと推測される。しかしながら、わが国において、リトミックが音楽教育の分野ではな

く、幼児教育の分野のものだと認識されることが多いのではないかと推測する調査は未だなされておらず、筆者はこれを実証するために、保育の現場で働く保育者と音楽大学に勤務する専任教員を対象に、リトミックの知名度や認知度について質問紙調査を実施することによって、幼児教育と音楽教育のそれぞれの分野におけるリトミックの位置づけについて調査したいと考えた。すでに筆者は、兵庫県と大阪府の幼稚園や保育所に勤務する保育者123名を対象に、保育の現場におけるリトミックの理解について質問紙調査¹⁾を実施しており、その結果、リトミックの名前を聞いたことのない保育者はいなかったが、リトミックの理解においては約70%の保育者がリトミックの創案目的を知らないと答えており、音楽の1教育方法論であるという理解が徹底されないまま、講習会などで得た実体験を拠り所として、リトミックの1側面のみが保育の中に取り入れられている現状が推察された。また、約64%の保育者がリトミックを保育の中に取り入れたいと考

* Rei NAGASHIMA 教育学部専任講師

1) 長島礼 2010 保育現場におけるリトミックの理解に関する一考察 関西学院大学教育学会教育学論究第2号 pp. 89–94

えている実態が明らかとなった。

本研究では、保育の現場におけるリトミックの実態を踏まえた上で、音楽教育の現場におけるリトミックの認知度について考察することによって、わが国におけるリトミックの在りようについて明らかにする。

Ⅱ. 研究方法

(1) 目的

ダルクローズは音楽の1教育方法としてリトミックを創案したが、そのリトミックが、わが国の音楽教育の場においてどのように理解され扱われているのかということ、音楽大学で後進の指導に携わる専任教員を対象に、質問紙調査によって明らかにする。

(2) 対象者

対象者は関西の音楽大学に勤務する専任教員で、配布総数26のうち回収数は11であった。回答者の専門の内訳は、ピアノが3名、声楽が3名、音楽療法が3名、音楽教育史が1名、無記入が1名であった。

(3) 実施方法

2009年11月に質問紙調査を実施。質問紙は各大学でまとめて頂き、返送して頂けるよう依頼した。質問項目は、以下の①～⑧で、「リトミックの知名度」「リトミックに対する認知度」「リトミックに対する興味」について調査し、最終項目では、リトミックに関して自由記述で意見を述べてもらった。

- ①回答者自身について（記述）
- ②「リトミック」という名前を知っているかどうか（選択回答）
- ③「リトミック」を実際に経験したことがあるかどうか（選択回答＋記述）
- ④「リトミック」の創案目的について（10項目より複数選択回答）
- ⑤「リトミック」が対象としている人の年齢層について（11項目より複数選択回答）
- ⑥「リトミック」と聞いて思い浮かぶこと、想像すること（自由記述）
- ⑦「リトミック」を学ぶことの必要性について（選択回答）また、その理由（自由記述）
- ⑧「リトミック」に関して思うこと（任意の自由記述）

Ⅲ. 結果と考察

本調査では、2校の音楽大学に勤務する教員を対象に、質問紙調査への協力を依頼した。質問紙の配布数が26と少ないことや、質問紙の配布総数が26であったのに対し回収数が11と少ないため、引き続き綿密な調査が必要であるが、返送されてきた質問用紙はどれも誠実に記入されており、音楽の専門家がリトミックをどのように理解し、また、必要としているのか、という本研究課題に対して、その傾向を押し量ることの出来る貴重な資料だと考えている。

本調査の結果、質問紙調査に協力頂いた教員の専門領域に偏りが見られた。協力頂いた教員の専門は、ピアノ（3名）、声楽（3名）、音楽療法（3名）、音楽教育史（1名）で、管楽器や弦楽器、打楽器を専門とする教員はいなかった。その理由として、ダルクローズが、「リズム運動は旋律と和声によって高尚になる…中略…ピアノで演奏される時、子供達の心と体の中に喜びと情熱がしみわたり創作力は直ちに刺激される²⁾。」と述べていることや、ダルクローズ自身もピアノの即興演奏に長けており、ダルクローズのリトミックメソッドが、主にピアノを使った即興演奏で展開されることと関係していると思われる。また、リトミックは、リトミック・ソルフェージュ・即興の3領域を柱として構成されているが、ピアノや音楽療法を専門とする者にとって、ピアノで即興演奏をする技術を身につけることは望ましく、また、修練が必要なため、奥深く興味深い領域である。このようなことを総合すると、ピアノを専門的に学んでいる者やピアノの即興を必要とする音楽療法の分野の者は、他の楽器を専門にしている者よりも、リトミックに興味をもつきっかけが多いのではないだろうか。以上の事柄が、回答者の専門性に偏りを生み出した要因の1つであると考えられないだろうか。

次に、質問紙調査より見出された結果を示す。

1. 【リトミックの知名度とリトミックの経験の有無について（回答者11名）】

回答者全員が「リトミックを知っている」と回答している。また、リトミックの経験者が6名おり、経験の程度は、短時間の講習を受講した者から海外に留学し専門的に学んだ者まで様々であった。

2) エミール・ジャック＝ダルクローズ著 板野平訳「リトミック・芸術と教育」全音楽譜出版社 1986 pp.7

2. 【リトミクの理解度について (回答者11名)】

【1】リトミクの対象年齢について (11項目より複数選択可)

リトミクは、音楽を学ぶ全ての年齢層の人を対象とした音楽の教育方法論として創案されたが、全ての年齢層と回答した者は3名で、10歳以下、或いは、10歳以下と他の年齢層を併せて回答している者が4名、無記入が4名であった(表1)。リトミクの対象者は10歳以下の子どもである、という認識が強いようであるが、対象年齢について確かな回答が出来ない者も4名おり、リトミクが音楽を学ぶあらゆる年齢層の人を対象とした音楽の教育方法論である、という認識は定着していないといえる。

表1 リトミクの対象年齢について (回答者11名)

	人数(人)
全ての年齢層と回答した者	3
10歳以下と回答した者	2
10歳以下・10歳代～20歳代と回答した者	1
10歳以下・60歳代～90歳代と回答した者	1
無記入	4

【2】リトミクの創案目的について (10項目より複数選択可)

リトミクの創案目的については、予め筆者が10項目を提示し、回答者は1項目、あるいは複数の項目を選択することができるようにした。結果は、リトミクの創案目的が幼児教育だと理解している者が7名、次いで、音楽教育、情操教育、人間教育が各々4名、舞踏教育、音楽療法、自己啓発が各々2名であった。ダルクローズが、音楽学校に通う学生の様子を研究することからリトミクを発案したことを鑑みると、本来リトミクは音楽の教育方法論であるはずだが、本調査結果では、情操教育、人間教育といった、音楽を学ぶことで派生的に育まれるものと組み合わせて創案目的としたものが多く、音楽の教育方法論としてのみ創案されたと回答している者はいない。リトミクが自己啓発やリラクゼーション、健康維持の為に創案されたと理解している者もあり、このように認知するに至った経緯は精査するに値する(表2-1)。

1人の回答者がどのような組み合わせで項目を選んでいるのか、という詳細については、表2-2に示す。

表2-1 リトミクの創案目的について (回答者11名)

	人数(人)
幼児教育	7
音楽教育	4
情操教育	4
人間教育	4
舞踏教育	2
音楽療法	2
自己啓発	2
リラクゼーション	1
健康維持	1
無記入	1

表2-2 リトミクの創案目的について

(回答者11名の選択項目の詳細)

	人数(人)
情操教育のみ	1
幼児教育のみ	2
人間教育・音楽教育	1
人間教育・情操教育	1
人間教育・情操教育・幼児教育・音楽教育	1
人間教育・情操教育・幼児教育・舞踏教育・自己啓発	1
幼児教育・音楽教育・舞踏教育	1
情操教育・幼児教育・音楽教育・音楽療法	1
幼児教育・自己啓発・音楽療法・リラクゼーション・健康維持	1
無回答	1

【3】リトミクと聞いて“連想する言葉”や“思い浮かぶこと”について (自由記述)

この質問は自由記述とした為、連想する言葉を1つだけ挙げている回答と、複数記載している回答がある。回答において注目すべき点は、リトミクと聞いて創始者であるダルクローズの名前を思い浮かべた者は1名で、リズム、ステップ、ダンス、体感運動など、身体で経験することを連想した者が10名であったことである。わが国で行なわれているリトミクが、ソルフェージュや即興よりも、音楽と身体の動きに注目されることが多いこと、また、音楽に合わせて動くという体験が、印象に残りやすいといえるのではないか。他にも、即興演奏や音感といった、より音楽教育的なものを連想した者や、リトミクを幼児や高齢者のみを対象としたメソッドだと考えている者も見受けられた(表3)。

表3 リトミックと聞いて“連想する言葉”や“思い浮かぶこと”
(回答者11名/複数記述可)

	人数(人)
リズム	5
ステップ	1
ダンス	1
体感 体感運動	3
柔軟性	1
ダルクローズ	1
Improvisation (即興)	1
即興演奏	1
音感	1
幼児教育 幼児用 幼児教室	1
老人健康維持	1

3. 【リトミックの必要性について (回答者11名)】

【1】音楽専攻の学生に対する必要性 (選択回答+自由記述)

11人中8名が「必要」「どちらかという必要」と回答している。また、「リトミックの効用がわからないので回答できない」という記述が2名、無回答が1名であった。

リトミックを必要と考えている理由について、下記のような記述が見られた。

【理由】

- ・障がい児には発達援助の手段として有効であり、障がい児に関わる可能性の多い職業につく学生も多いため
- ・表現することのボキャブラリーが乏しいため
- ・将来何らかの形で音楽表現を主とした教授の場に立つ予定の学生は、自らの体験が大変重要であると考えている。
- ・動きと音楽の関連性を考える上で重要
- ・メロディーばかりに着目するのではなく、リズムを感じることが音楽の構成感を認識することと考えているため

【2】教員自身に対する必要性 (選択回答+自由記述)

11人中リトミックを長期間学んだ経験のある2名を除き、残りの9名中7名が「機会があれば学びたい」と回答している。しかし、機会があれば学びたいとしながらも、現実的には自分の専門領域を深めることに比重がおかれ、時間が取れないというのが本音のようである。

また、7名の回答者のうち3名の回答者より、下記のような記述が見られた。

【意見】

- ・「リトミック」という分野を単なる幼児教育、リズム遊び的な誤った認識をしている音楽関係者が多いのではないかと思う。本当の内容が認知される機会が増えるべきである。
- ・あらゆる種類のメソッドに言えることだが、メソッドがマニュアル化されすぎたり、楽派・流派ごとに争いが起こって、人の人格形成の発展・能力の向上といった本来の目的から後退していくことがある。有機的、柔軟に対応できるメソッドであってほしい。
- ・大学で音楽を専門的に学ばなくても、教室が開けてしまうことに疑問をもつ。

IV. まとめ

質問項目⑦で、声楽を専門とする回答者が「メロディーばかりに着目するのではなく、リズムを感じることが音楽の構成感を認識することと考えている為、リトミックを学ぶことは必要である」と述べているように、リトミックは、前述した鍵盤楽器等の特定の楽器を学ぶ者にのみ効用があるのではなく、音楽への学びを深めたいと望む、あらゆる年齢層、あらゆるレベルの人々を対象としたメソッドである。音楽の基礎的な能力を身に付けた者にとっても、それまでの学びをより確実にするため、それまでとは違う観点に立って学びなおすことのできるメソッドである。また、質問項目⑦で教員自身にとってリトミックを学ぶ必要を感じるか、という問いでは「リトミックを学んでみたいが、自分の専門を深めることに精一杯で、現実的にはなかなか時間が作れない」という意見が複数見受けられた。リトミックを学ぶことで自分の音楽性が豊かになり、演奏技術の向上に結びつくと思えることが、リトミックに興味をもち、リトミックを正しく認知する原動力になるのではないだろうか。本調査を引き続き行ない、様々な意見を得ながら、わが国における音楽教育としてのダルクローズリトミックの、より良き実践の形態について、追求していきたいと考えている。

わが国では、1998年に日本ジャック＝ダルクローズ協会が発足し、国際的に活動を展開しようとしている。例年春期と夏期にセミナーを開催している

が、セミナーではリトミックの理論と実践が網羅されており、音楽の専門家が更なる学びをする場として筆者は注目している

参考文献

- ・エミール・ジャック＝ダルクローズ著 板野平訳 1986 リトミック・芸術と教育 全音楽譜出版社
- ・エミール・ジャック＝ダルクローズ著 板野平訳 1975 リズムと音楽と教育 全音楽譜出版社
- ・江間孝子 山崎悦子 1997 ダルクローズ・リトミック教育の実践現場から見た諸問題 日本ダルクローズ音楽教育研究会 第22号 pp.33-48
- ・長島礼 2010 保育現場におけるリトミックの理解に関する一考察—質問紙調査から見える課題— 関西学院大学教育学会 第2号 pp.89-94
- ・日本ダルクローズ音楽教育学会編 2003 日本ダルクローズ音楽教育学会創立30周年記念論文集 リトミック研究の現在 開成出版
- ・日本ダルクローズ音楽教育学会編 2008 日本ダルクローズ音楽教育学会創立35周年記念論文集 リトミック実践の現在 開成出版
- ・福岡省吾 2001 パネルディスカッションⅡ 保育者養成校におけるリトミックの取り扱い 日本ダルクローズ音楽教育学会 第26号 pp.47-51